

他者の視点に立つことは ステレオタイプ低減に貢献するか¹⁾

田村 美恵

問 題

近年、わが国における在留外国人の数は増加の一途を辿っている。法務省入国管理局 (2019) に拠れば、在留外国人数は 2012 年末から段階的に増え続け、2018 年末には 273 万 1,093 人と、過去最高を突破したという。なかでも、留学生数は 33 万 7,000 人 (全体の 12.3%) に上る。国別では、中国人留学生が 132,441 人 (約 39%) と最も多く、これに、ベトナム、ネパール、韓国など、アジアからの留学生で全体の 80% 以上を占める。

一方、日本にきた外国人留学生がさまざまな問題に直面することは、しばしば指摘されている。留学生にとって、ホスト国の学生と良好な友人関係を結ぶことは、異文化適応を促進する上で重要であるが (Church, 1982; 小松, 2016; Pavel, 2006)、実際には、大学キャンパス内での留学生の交友関係は、同国出身者に偏りがちであり、ホスト側の日本人学生との間には交友関係が構築されにくいという報告が多数見出される (e.g., 石倉・吉岡, 2004; 戦, 2007; 国際化推進協会, 2016)。

異文化間接触の障壁となる要因の 1 つに、ステレオタイプが挙げられる (e.g., Brislin, 1988; Jandt, 2001; Lebedko, 2014; Rodgers & McGovern, 2002)。一般に、外集団に対してネガティブなステレオタイプを抱くほど、外集団メンバーとの相互作用に対する不安や脅威が喚起され (e.g., Brislin, 1988; Gordijn, Finchilescu, Brix, Wijnants, & Koomen, 2008)、外集団メンバーとの接触欲求が低下し、また、実際の接触量も低下する可能性があるとされている (勝谷・山本・坂元, 2001)。

1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第 60 回大会で発表された。

では、ポジティブな異文化間接触を促進すべく、ネガティブなステレオタイプを低減させるには、どのようにすればよいのか。外集団に対するステレオタイプを意図的に抑制しようとすることは、一見、効果的に思えるが、実際には、そうした認知的努力は、むしろ、リバウンド的にステレオタイプの反応を生じやすくすることが指摘されている (Macrae, Bodenhausen, Milen, & Jetten, 1994; Wegner, 1994)。

こうしたアプローチに代わり、近年、ステレオタイプ化を低減しうる認知方略として注目されているのが、パースペクティブ・テイキング (perspective taking) である。パースペクティブ・テイキング (以下、PT) とは、他者の視点／立場を想像し、自分が他者になったつもりで世界を見ようとする認知的努力 (e.g., Galinsky & Ku, 2004; Galinsky, Ku, & Wang, 2005; Galinsky & Moskowitz, 2000; Vorauer, 2013) のことを指す。

例えば、Galinsky & Moskowitz (2000, 実験 1) では、実験参加者に、ある外集団メンバー (老人) をターゲットとして提示し、彼の典型的な一日の出来事を想像して、エッセーを書くように求めた。その際、外集団 (老人) ステレオタイプを意図的に抑制するよう求められた実験参加者よりも、ターゲットになったつもりで、彼の目や耳を通して外界を眺めるよう、PT を求められた実験参加者において、外集団に対するステレオタイプ化が低減され、外集団がよりポジティブに評価されることが見出された。これは、PT を行うことで、自己とターゲットがオーバーラップし、自他の類似性が促進される (Galinsky, Ku, & Wang, 2005) ことで、自己 (のポジティブな属性) がターゲットやターゲットの所属する外集団全体に投射される (社会的投射) ためであるとされる。

集団間態度に及ぼすこうした PT のポジティブな効果を報告している研究は多いが (e.g., Galinsky et al., 2005; Shih, Wang, Trahan, Bucher & Stotzer, 2009; Todd, Bodenhausen, Richeson & Galinsky, 2011; Vescio, Sechrist & Paolucci, 2003)、一方で、近年では、PT が常にステレオタイプや偏見の低減に貢献するわけではないことも明らかになってきた (for review, Vorauer, 2013)。

例えば、Vorauer & Sasaki (2009) では、白人系カナダ人を実験参加者とし、アボリジニの女性をターゲットとして、この女性が登場する 5 分間のドキュメンタリー番組 (カナダにおけるターゲット女性の過酷な生活状況に関する内容) を視聴させた。その結果、ターゲットの心情から距離を取り、客観的にビデオを見るよう求められた参加者 (客観条件) よりも、ターゲットになったつもりで、彼女がどのように感じているかについて想像しながらビデオを見るよう求められた実験参加者 (PT 条件) の方が、むしろ、アボリジニに

対する偏見を増大させていたのである。このように、PT が集団間態度にネガティブな影響を及ぼすという現象 (backfire) を報告している研究も少なくない (e.g., Berndsen, Thomas, & Pedersen, 2018; Bruneau & Saxe, 2012; Mooijam & Stern, 2016; Pornprasit & Boonyasiriwat, 2018; Skorinko, & Sinclair, 2013; Tarrant, Calitri, & Weston, 2012; Vorauer, Martens, & Sasaki, 2009)。

Backfire を生じさせる理由としては、例えば、「外集団メンバーは自分たちのことを悪く評価するのではないか」という自己への評価懸念 (Voraure, 2013; Vorauer & Sasaki, 2009) や自己の目標追求に対する脅威 (Mooijam & Stern, 2016)、認知者の PT 方略の違い (Vorauer & Quesnel, 2013; Vorauer & Sasaki, 2014) や内集団同一性の強さ (Pornprasit & Boonyasiriwat, 2018, Tarrant et al., 2012)、内-外集団の関係性が競争的か否か (Pierce, Kilduff, Galinsky, & Sivanathan, 2013) といった要因が指摘されている。

PT が集団間態度に及ぼす影響については、これまで、さまざまな集団やターゲットを対象として行われてきたが、日本において PT に関する研究はほとんどなく、また、在日留学生をターゲットとした研究は皆無である。

そこで、本研究では、「日本人学生」を実験参加者とし、留学生のうち最も多い「中国人留学生」を外集団として、PT が集団間態度にどのような効果を及ぼすのかについて、外集団に対するステレオタイプ化の程度、自己と外集団メンバーとの類似性認知、外集団への接近欲求といった点から検討する。

また、本研究では、併せて、認知者 (実験参加者) がどのような PT を行ったのか、その方略/様態の違いの影響についても探索的に検討する。

Vorauer ら (e.g., Vorauer, 2013; Vorauer & Quesnel, 2013; Vorauer & Sasaki, 2014) は、PT には 2 つの方略があるとする。1 つは、自己とターゲットの視点/立場を重ね合わせ、「自分がもしターゲットなら、どのように考え、感じるか」というように、自己を基点にターゲットの心情等について想像する“自己想像的 (self-imagined)” PT であり、もう 1 つは、自己とターゲットの視点を区別した上で、「(自分ではなく) ターゲット自身が、どのように考え、感じるか」というように、ターゲットの心情等について想像する“他者想像的 (other-imagined)” PT である。このうち、(とりわけ自己への評価懸念が存在する状況下では) 集団間態度にポジティブな効果を及ぼすのは、自己想像的 PT の方であるとされている。

一方で、こうした方略の違いについて検討したものの中には、明らかな差異が見出されなかったとする報告も散見され (Davis, Soderlund, Cole, Gadol, Kute, Myers, & Weihing, 2004; Galinsky, Wang, & Ku, 2008; Todd et al., 2011)、結果は必ずしも一貫していない。

通常の実験手続きでは、自己想像的 PT、または他者想像的 PT のいずれか一方に関する教示を行い、実験参加者に、当該方略を採るよう求めるが (e.g., Vorauer & Quesnel, 2013; Vorauer & Sasaki, 2014)、こうしたやり方では、参加者自身は方略の違いをはっきりとは区別出来ず、その結果、方略による差異が見出されにくいとの指摘がある (Todd, et al., 2011)。

そこで、本研究では、認知者 (実験参加者) がどのようにしてターゲットの心情等を想像したのか、ターゲットに関する自由記述 (エッセー) を手がかりに、彼らが採った方略を分析・分類することで、PT 方略の違いが外集団への態度に及ぼす影響について探索的に検討する。

仮説は以下の通りである。

仮説 1 PT を行った場合の方が、そうでない場合に比べ、外集団に対する態度がよりポジティブになるだろう。すなわち、外集団に対するステレオタイプ化の程度がより低く、また、自己との類似性認知や外集団メンバーへの接近欲求が高いだろう。

仮説 2 PT の方略によって外集団への態度が異なり、自己想像的 PT を行った場合の方が、そうでない場合に比べ、外集団に対する態度がよりポジティブになるだろう。すなわち、前者の方が、外集団に対するステレオタイプ化の程度がより低く、また、自己との類似性認知や外集団メンバーへの接近欲求が高いだろう。

方 法

実験参加者

兵庫県下の公立の外国語大学学生 109 名 (男性 35 名、女性 74 名、平均年齢=18.4、 $SD=0.63$) であった。参加者は、PT に従事するよう教示される条件 (PT 条件) とそうした教示がない条件 (コントロール条件) とに、ランダムに割り当てられた。

予備調査

実験に先立って、「中国人留学生」に対するネガティブなステレオタイプを測定するための評定項目を作成した。本実験とは異なる 38 名 (男性 9 名、女性 29 名) の調査参加者に、中国や中国人に関するイメージ調査の研究等 (e.g., 大坪, 2011; 上瀬・萩原・李, 2010; 山口, 2001) を参考に、ポジティブ特性とネガティブ特性を含めた 56 個の性格特性語を提示し、各特性語が中国人留学生の一般的なイメージにどの程度あてはまるかについて、「非常にあてはまる (7)」～「全くあてはまらない (1)」の 7 段階で評定を求めた。

その後、各特性語について平均評定値を算出し、ネガティブ特性のうち、平均評定値が高かった順に 5 つの性格特性語を選出した²⁾ (自己主張が強い、気が強い、感情的な、騒々しい、おおざっぱな)。これらについて、それぞれ、各平均評定値と評定の中央値 (4) との間で両側検定を行ったところ、すべての評定値が中央値より有意に高かったため、これらを中国人留学生に対するステレオタイプ測定項目とした。また、同様の両側検定の結果、中央値と有意に異ならなかった 14 の性格特性語 (ネガティブ特性 8、ポジティブ特性 6) をステレオタイプ無関連項目として選出し、ステレオタイプタイプ測定項目 5 項目と併せ、全部で 19 項目からなる評定尺度を作成した。

また、中国人留学生に対する好意度についても確認するため、上述の 38 名の調査参加者に、中国人留学生に対して、「非常に好感が持てる—全く好感が持てない」 (好感度)、「非常に親しみを感じる—全く親しみを感じない」 (親しみやすさ)、「非常に好きである—全く好きでない」 (好悪) の 3 項目について 7 段階で評定を求め (値が高いほど好意的であることを示す)、平均評定値を算出した。その結果、好感度 ($M=4.27, SD=1.04$)、親しみやすさ ($M=3.84, SD=1.24$)、好悪 ($M=4.27, SD=1.16$) の平均評定値は、いずれも評定尺度の中央値 (4) と有意差がなく (好感度 $t(36)=1.57$, 親しみやすさ $t(36)=-.80$, 好悪 $t(36)=1.27$, すべて *n.s.*)、中国人留学生に対しては、ほぼ中立的な態度を有していることが確認された。

実験手続き

実験は、社会心理学の授業時間の一部を利用して集団で実施した。実験のための教示、及び従属変数を一冊の冊子に印刷して、実験参加者に配布した。

初めに、「調査 1」と称し、自己の性格特性についての評定を求めた。上述の予備調査で算出された 19 個の性格特性語を提示し、それらが自分自身に「非常にあてはまる (7)」～「全くあてはまらない (1)」まで、7 段階で評定を求めた。なお、これは後で、自己と「中国人留学生」との類似性認知についての分析に使用するためである。

外集団メンバーの提示 次に、「調査 2」と称し、ターゲットとなる一人の中国人留学生を提示した。まず、調査 2 の目的について、Galinsky & Moskowitz (2000) などを参考に、「人が限られた情報から、その他の関連する情報を、どの程度詳細に言語的に構成できるのかについて検討すること」

2) 平均評定値が高かったものの中には、ポジティブ特性 (e.g., まじめな、積極的な、前向きな、元気な) 等も含まれていたが、本研究の目的に照らし、PT に関する先行研究と同様に、ネガティブ特性のみをステレオタイプ評定項目として選出した。

であると教示した後、「中国人留学生のリュウさん」（大学1年生、性別は実験参加者と同性とした）をターゲットとして提示し、ターゲットに関する次のような簡単な近況的情報を提示した。「リュウさんは、中国から来た留学生です。日本に来て約3ヶ月が経ちました。日本人の友人はまだいませんが、中国人留学生の友だちは、何人かできました。日本語を聞き取る能力は充分ですが、話す力は少し不十分です」。なお、このような記述は、在日留学生に関する調査結果（e.g., 国際化推進協会, 2016）等を参照し、留学生の典型的な状況を反映したものになるよう工夫した

PTの操作 その後、リュウさんの「よくある（いつもの）一日」について想像し、その内容について、5分間でエッセーを書くように求めた。その際、半数の実験参加者には、「リュウさんの視点に立ち、リュウさんが考えたり、感じたり、経験したりするであろうことについて、リュウさんになったつもりで、生き生きと想像しながら書いて下さい」（下線部はゴシック体表記）と教示した（PT条件）。残りの参加者には、このような教示はなかった（コントロール条件）。

操作チェック エッセーの記述が終わった後、PTへの関与度について尋ねた。具体的には、エッセーを書いている間の自分自身の態度について、「リュウさんになったつもりで、彼／彼女の考え方、感じ方、経験したと思われることなどを、できるかぎり考慮しようとした」程度に関して、「非常にあてはまる（6）」～「全くあてはまらない（1）」の6段階で評定を求めた。

フィラー課題 次に、「調査3」と称して、フィラー課題を行った。課題の目的を「2つの異なる種類の情報を同時に処理する能力を測る調査である」と称し、ストループ課題を行った。実験参加者は、練習試行を1試行行った後、本試行を10試行行った。ストループ課題用の刺激は、教室に備え付けの5台のスクリーンで同時投影した。参加者は、冊子に綴じ込まれた「回答用紙」に、自分の回答を記入した。各試行のインターバルは、約30秒間であり、参加者が回答し終えたのをその都度確認の後、次の試行に移った。フィラー課題に要した時間は約15分間であった。

外集団に対するステレオタイプ測定 「調査4」と称し、「中国人留学生」に対するステレオタイプの測定を行った。具体的には、予備調査で選出したステレオタイプ測定項目5項目を含む19個の性格特性について、「非常にあてはまる（7）」～「全くあてはまらない（1）」の7段階で評定してもらった。

外集団メンバーへの接近欲求の測定 中国人留学生に対する接近欲求について測定するため、6項目（逆転項目2項目を含む）から成る接近回避尺度（Yashima, Zenku-Nishide, & Shimizu, 2004）について、「かなりそう思う（6）」

～「ほとんどそう思わない(1)」の6段階で評定してもらった。値が高くなるほど接近欲求が高いことを示す。また、中国人留学生の知人の有無についても尋ね、知人のいる場合には、その人数についても回答を求めた。

最後に、参加者自身について、年齢、性別、国籍等について記入してもらい、実験を終了した。実験に要した時間は約40分程度であった。実験終了後にディブリーフィングを行い、本研究の真の実験目的に関する説明を行った。また、結果の取り扱いにおける匿名性の保証等については、実験用冊子に予め記載されていたが、実験終了後に再度口頭で説明し、データ利用の可否について、文書での同意確認を行った。なお、データ利用を拒否した者はいなかった。

結 果

1. 操作チェック

実験参加者のうち、中国語学科所属の実験参加者10名は、反応に偏りがある可能性が考えられたため、分析から除外した。また、操作チェックの結果、PTへの関与度が不十分であったと思われる者(6段階評定中、評定値が2以下の者)4名を除外し、95名を分析の対象とした。なお、操作チェック(PTへの関与度)の値について、PT条件とコントロール条件別に平均値を算出し、それらの値について t 検定を行った結果、PT条件($M=5.22$)の方がコントロール条件($M=3.57$)よりも値が有意に高く($t(93)=7.42, p<.01$)、PTの操作の有効性が確認された。また、知人の人数について、PT条件($M=0.56$)とコントロール条件($M=0.48$)別に平均値を算出し、条件間で t 検定を行ったが、有意差は得られず、知人の人数は条件間で差がないことを確認した($t(93)=.38, n.s.$)。

2. PTの有無が集団間態度に及ぼす影響

(1)外集団に対するステレオタイプ化について

5個のステレオタイプ測定項目について、PT条件とコントロール条件別に平均値を算出し(Table 1)、これらの値について t 検定を行ったが、有意差は得られなかった($t(93)=.60, n.s.$)。これは、PTへの従事が外集団に対するネガティブ・ステレオタイプの低減には必ずしも寄与しないことを示しており、仮説1(PTを行った場合の方がそうでない場合に比べ、外集団に対するステレオタイプ化の程度がより低いだろう)は、支持されなかった。

Table 1 PT 条件とコントロール条件における各指標の平均値 (SD)

	PT 条件 (<i>n</i> =49)	コントロール条件 (<i>n</i> =46)
ステレオタイプ化	5.14 (0.95)	5.03 (0.84)
外集団との類似性認知 (β)	.02 (0.28)	.03 (0.35)
外集団への接近欲求	29.10 (5.81)	29.87 (4.65)

(2)自己と外集団メンバーとの類似性認知について

次に、自己と外集団メンバーとの類似性認知について検討するため、ステレオタイプ測定項目を除いた 14 個のステレオタイプ無関連性格特性語について、参加者毎に、自己評定値を説明変数、外集団メンバー（中国人留学生）に関する評定値を従属変数として回帰分析を行い（個人内回帰分析）、 β 係数を算出して、自他の類似性を表す指標とした。このような指標は、従来、社会的投射（social projection）研究において使用されており（e.g., Clement & Krueger, 2000; Otten & Wentura, 2001）、自己の属性／特性をどの程度他者に投射するか、そのオーバーラップ／類似性の程度を示す指標の 1 つとされる。 β 係数の平均評定値を条件毎に算出し（Table 1）、*Z* 値変換後の値について条件間で *t* 検定を行ったが、有意差は得られなかった（*t* = -.17, *df* = 84.7, *n.s.*）。これは、PT 条件とコントロール条件とで、自己と外集団メンバーとの類似性認知は異ならないことを示しており、仮説 1（PT を行った場合の方がそうでない場合に比べ、自己との類似性認知が高いだろう）は支持されなかった。

(3)外集団メンバーへの接近欲求

外集団メンバーへの接近欲求について、PT 条件とコントロール条件別に平均値を算出し（Table 1）、条件間で *t* 検定を行ったが、有意差は得られなかった（*t*(93) = -.71, *n.s.*）。これは、PT が外集団メンバーへの接近欲求を必ずしも高めないことを示しており、仮説 1（PT を行った場合の方がそうでない場合に比べ、外集団メンバーへの接近欲求が高いだろう）は支持されなかった。

3. PT 方略の違いが集団間態度に及ぼす影響

(1)PT 方略の違いに基づく実験参加者の群分け

まず、実験参加者が記したターゲットに関するエッセーをもとに、彼らがどのような PT 方略を用いたのかを分析し、方略毎に参加者を分類した。そ

の際、Vorauer & Sasaki (2014) を参考に、以下のように参加者の群分けを行った。

Vorauer & Sasaki (2014) は、ターゲットに関する記述の中に、どのような主語や代名詞が用いられているかが、PT 方略を区別する手がかりとなりうるとしている。具体的には、自己想像的 PT では、自己をターゲットに重ね、「自分がもしターゲットならどうだろうか」と想像するため、一人称の主語 (I) が多用される。一方、自己をターゲットから区別した上、ターゲットの視点から想像する他者想像的 PT では、三人称の主語 (he/she) や一人称の目的格 (me) が多用される傾向にあるとする。

こうした見解を踏まえ、また、日本語では、慣例的に、主語が省略されることが多いという点も考慮し、本研究では、エッセー中で、①一人称の主語 (私は) を用いて記述している、②主語が省略されてはいるが、希望の助動詞 (～たい、～したい) や感情を表す形容詞 (e.g., 楽しい、うれしい、悔しい) など、通常、一人称の主語とともに使用される言葉で述部を記している、という参加者を、「自己想像的 PT への関与が高い者」(以下、自己想像的 PT 高群) として分類した (27 名)。残りの参加者については、殆どの場合、エッセー中で主語が省略されており、他者想像的 PT の手がかりになる三人称主語 (リュウさん) の使用が見られたのは、6 人のみであった。また、記述内容も、ターゲットの心情よりはむしろ、行動に関するものが多く、他者想像的 PT が行われていると明確に判断するには至らなかった。そのため、本研究では、残りの参加者を (他者想像的 PT という言葉は用いず) 「自己想像的 PT への関与が低い者」(以下、自己想像的 PT 低群) として分類した (22 名)。

なお、PT への関与度 (操作チェック) について、群間で t 検定を行ったところ、自己想像的 PT 高群 ($M=5.41$) の方が低群 ($M=5.00$) よりも評定値が高い傾向が見出された ($t(47)=1.82, p<.10$)。

(2)PT 方略の違いによる影響について

次に、PT 方略の違いが外集団に対するステレオタイプ化、類似性の認知、接近欲求のそれぞれに及ぼす影響について検討するため、各指標の平均値を自己想像的 PT の高群、低群毎に算出し (Table 2)、それらの値について、群間で t 検定を行った。

その結果、まず、外集団に対するステレオタイプ化の程度については、仮説とは逆に、自己想像的 PT 低群よりも高群において、評定値が有意に高くなっていた ($t(47)=2.46, p<.05$)。また、各群とコントロール条件との間でそれぞれ t 検定を行ったところ、自己想像的 PT 高群については、コントロール

Table 2 自己想像的 PT 高群と低群における各指標の平均値 (SD)

	自己想像的 PT	
	高群 (n=27)	低群 (n=22)
ステレオタイプ化	5.43 (0.78)	4.79 (1.04)
外集団との類似性認知 (β)	-.06 (0.24)	.12 (0.29)
外集団への接近欲求	28.70 (5.94)	29.59 (5.74)

条件よりも評定値が有意に高く ($t(71)=2.01, p<.05$)、外集団がよりステレオタイプの的に見なされていた。このことは、仮説とは逆に、自己を相手の視点／立場に重ねるような自己想像的 PT に従事するほど、かえって、外集団に対するステレオタイプ化が強まること (backfire) を示している。

一方、自己想像的 PT 低群については、評定値がコントロール条件よりも低くなる傾向が見られたが (Table 2)、有意差には至らなかった ($t(66)=-1.02, n.s.$)。以上のことから、仮説 2 (自己想像的 PT を行った場合の方がそうでない場合に比べ、外集団に対するステレオタイプ化の程度がより低くなるだろう) は、支持されなかった。

自己と外集団メンバーとの類似性認知 (Table 2) についても、仮説とは逆の結果が得られた。すなわち、自己想像的 PT 高群よりも、むしろ低群の方が類似性を高く認知していた ($t(47)=2.41, p<.05$)。以上より、仮説 2 (自己想像的 PT を行った場合の方がそうでない場合に比べ、自己との類似性認知が高いだろう) は支持されなかった。

なお、外集団メンバーとの類似性認知について、自己想像的 PT の各群とコントロール条件との間で t 検定を行った結果、自己想像的 PT 高群とコントロール条件との間 ($t(71)=-1.33, n.s.$)、および、自己想像的低群とコントロール条件との間 ($t(66)=1.02, n.s.$) のいずれにおいても、有意差は見出されなかった。

接近欲求についても同様に、自己想像的 PT 高群と低群における平均評定値 (Table 2) について t 検定を行ったが、有意差は得られず ($t(47)=-.53, n.s.$)、PT 方略の違いによる影響は見出されなかった。したがって、仮説 2 (自己想像的 PT を行った場合の方がそうでない場合に比べ、外集団メンバーへの接近欲求が高いだろう) は支持されなかった。

考 察

本研究では、日本人学生を実験参加者とし、中国人留学生を外集団として、PT への関与の有無や PT 方略の違いが、集団間態度にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。

その結果、まず、全体的傾向として、PT への関与の有無は、外集団に対するステレオタイプ化、自己との類似性の認知、接近欲求のいずれに対しても、ほとんど効果を及ぼしていなかった (null effect)。これは、仮説に反して、PT に関与することが、必ずしも、外集団に対するネガティブな態度を低減するわけではないことを示している。

こうした結果が得られた理由の一つは、PT 方略の違いにあると考えられる。本研究では、実験参加者が書いたエッセーをもとに、PT 方略を 2 つに分類した。その結果、自己を外集団メンバーの視点に重ね合わせる自己想像的 PT に強く関与した場合には、外集団へのネガティブな態度 (ステレオタイプ化) が喚起されていた (backfire) のに対して、そうした方略への関与が強くなかった場合には、backfire は見出されなかった。本研究では、それぞれの方略を採った実験参加者がちょうど半数程度ずつ混在していたため、その作用が相殺され、結果として、PT の効果がはっきりとは得られなかったのではないと思われる。

上述のように、PT 方略の影響については、本研究では、仮説とは逆に、自己想像的 PT は、自己と外集団メンバーの類似性認知をむしろ低下させ、外集団に対するステレオタイプ化を強める方向に作用していた。一方、先にも述べたように、先行研究のなかには、自己想像的 PT が外集団に対するステレオタイプ低減に寄与するという結果を得ているものもある (e.g., Todd et al., 2011; Vorauer & Sasaki, 2014)。こうした違いは、なぜ生じたのだろうか。

Pierce et al. (2013) は、PT がどのような作用を及ぼすかは、実験状況に関連するより広い文脈、具体的には、内・外集団間の所与の関係性に依存し、PT は、当初の集団間関係の色合い (協力的／好意的か、競争的／敵対的か) を増幅する方向に作用すると指摘する。実際、競争的關係にある外集団メンバーに対しては、PT を介すことで、非好意的な態度がより強められてしまうことも報告されている (e.g., Epley, Caruso, & Bazerman, 2006)。

こうした見解に基づけば、今回のような結果が得られた理由の 1 つとしては、本研究の実験参加者が、中国人留学生に対して、あまり好意的ではない初期態度を有しており、そうした態度が PT に従事するなかで強められてしまった可能性が考えられる。先述のように、本実験に先立つ予備調査では、

中国人留学生に対する初期態度が比較的中立的であることを確認しているが、本実験の参加者は、予備調査の参加者とは同一ではないため、彼らの中国人留学生に対する初期態度は、予備調査参加者のそれとは異なり、中立的ではなかった可能性もある。今後は、実験前と実験後で、実験参加者自身の外集団に対する態度を測定し、その変化について検討するといったやり方で、PTの効果について検討する必要があるだろう。

その他にも、自己想像的PTに関するbackfire効果が見られた理由としては、実験参加者に提示した外集団メンバー（ターゲット）についての情報の影響が考えられる。本研究では、ターゲットに関する簡単な近況の情報（「日本の友人はいませんが、中国人留学生の友だちは、何人かできました」「日本語を聞き取る能力は充分ですが、話す力は少し不十分です」等）を提示したが、その内容が集団間（日本人学生－中国人留学生）の葛藤的状况を連想させるようなものであった可能性がある。実際、ターゲットに関するエッセーのなかには、提示された近況情報と関連させるかたちで、“言葉（日本語）が話せず、周りになじめない”、“日本語がまだうまく話せないから話しかけられても会話が続かない”、“日本人ばかりで、中国人の友だちが一人もいないクラスだから、授業は行くのがおっくうだった”などのネガティブ経験を連想し、記述しているケースが目立った。PTによって、このような内容、すなわち、「外集団は、自分たちに対して、好ましくない感情や体験を有しているだろう」というネガティブなメタステレオタイプが想起されたことにより、外集団へのネガティブな態度が促進され、ステレオタイプが低減されにくくなった可能性も考えられる。

なお、これは、別の見方をすれば、PTの際にどのような内容が想起されるかによって、PTがステレオタイプ低減に及ぼす効果が左右されるということを示唆するものとも考えられる。今後は、どのような状況下でのPTが外集団に対する態度改善に貢献するのか、その状況を実験的に操作し、想起内容との関連で、PTの効果について検討することが求められるだろう。

引用文献

- Berndsen, M., Thomas, E. F., & Pedersen, A. (2018). Resisting perspective-taking: Glorification of the national group elicits non-compliance with perspective-taking instructions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **79**, 126-137.
- Brislin, R. (1988). Prejudice in intercultural communication. In L. A. Samovar & R.

- E. Porter (Eds.), *Intercultural communication: A reader*. Belmont CA: Wadsworth.
- Bruneau, E., & Saxe, R. (2012). The power of being heard: The benefits of ‘perspective-giving’ in the context of intergroup conflict. *Journal of Experimental Social Psychology*, **48**, 855-866.
- Church, T.A. (1982). Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, **91**, 540-572.
- Clement, R. W., & Krueger, J. (2000). The primacy of self-referent information in perceptions of social consensus. *British Journal of Social Psychology*, **39**, 279-299.
- Davis, M.H., Soderlund, T., Cole, J., Gadol, E., Kute, M., Myers, M., & Weihing, J. (2004). Cognitions associated with attempts to empathize: How do we imagine the perspective of another? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 1625-1635.
- Epley, N., Caruso, E., & Bazerman, M. H. (2006). When perspective taking increases taking: Reactive egoism in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 872-889.
- Galinsky, A. D., & Ku, G. (2004). The effects of perspective-taking on prejudice: The moderating role of self-evaluation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 594-604.
- Galinsky, A. D., Ku, G., & Wang, C. S. (2005). Perspective-taking and self-other overlap: Fostering social bonds and facilitating social coordination. *Group Processes & Intergroup Relations*, **8**, 109-124.
- Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2000). Perspective-taking: Decreasing stereotype expression, stereotype accessibility, and in-group favoritism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 708-724.
- Galinsky, A. D., Wang, C. S., & Ku, G. (2008). Perspective-takers behave more stereotypically. *Journal of Personality and Social Psychology*, **95**, 404-419.
- Gordijn, E., Finchilescu, G., Brix, L., Wijnants, N., & Koomen, W. (2008). The influence of prejudice and stereotypes on anticipated affect: Feelings about a potentially negative interaction with another ethnic group. *South African Journal of Psychology*, **38**, 589-601.
- 法務省入国管理局 2019 平成 30 年末現在における在留外国人数について.
(http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html)
- 戦 旭風 (2007). 友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係. *留学生教育*, **12**, 95-105.

- 石倉健二・吉岡久美子 (2004). 大学生活における心身の健康に関する調査：留学生と日本人学生の適応とヘルパー志向. 長崎国際大学論叢, **4**, 225-232.
- Jandt, F. E. (2001). *Intercultural communication: An introduction* (third ed.). Thousand Oaks: Sage.
- 上瀬由美子・萩原滋・李光鎬 (2010). 北京オリンピック視聴と中国・中国人イメージの変化：大学生のパネル調査分析から. メディア・コミュニケーション：慶応大学メディア・コミュニケーション研究所紀要, **60**, 67-88.
- 勝谷紀子・山本直美・坂元 章 (2001). アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ：女子の大学生に対する実験. 社会心理学研究, **17**, 43-54.
- 小松 翠 (2016). 中国人留学生の友人関係不満に関する原因帰属と日本人イメージの関連について 高等教育と学生支援, **7**, 129-139.
- 国際化推進協会 (2016). 日本留学生に関する最終報告.
(<http://japi.or.jp/wp-content/uploads/2016/12/%E7%95%99%E5%AD%A6%E7%94%9F%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8-v2.1.pdf>)
- Lebedko, M. G. (2014). Interaction of ethnic stereotypes and shared identity in intercultural Communication. *Social and Behavioral Sciences*, **154**, 179 – 183.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milen, A. B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 808-817.
- Mooijam, M., & Stern, C. (2016). When perspective taking creates a motivational threat: The case of conservatism, same-sex sexual behavior, and anti-gay attitudes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **42**, 738-75.
- 大坪寛子 (2011). 日本および関係国のナショナル・イメージについての世代別検討. 三田社会学, **16**, 52-72.
- Otten, S., & Wentura, D. (2001). Self-anchoring and in-group favoritism: An individual profiles analysis. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 525-532.
- Pavel, S. (2006). Interaction between international and American college students: An Exploratory study. *The Wesleyan Journal of Psychology*, **1**, 39-55.
- Pierce, J. R., Kilduff, G. J., Galinsky, A. D., & Sivanathan, N. (2013). From glue to gasoline: How competition turns perspective taking unethical. *Psychological Science*, **24**, 1986-1994.
- Pornprasit, N., & Boonyasiriwat, W. (2018). The effects of perspective-taking on

- prejudice reduction among Thais: The moderating role of relational self-esteem. *Kasetsart Journal of Social Science*, **30**, 1-5.
- Rodgers, J. S., & McGovern, T. (2002). Attitudes toward the culturally different: The role of intercultural communication barriers, affective responses, consensual stereotypes, and perceived threat. *International Journal of Intercultural Relations*, **26**, 609-631.
- Shih, M., Wang, E., Trahan, M., Bucher, A., & Stotzer, R. (2009). Perspective taking: Reducing prejudice towards general outgroups and specific individuals. *Group Processes & Intergroup Relations*, **12**, 565-577.
- Skorinko, J. L., & Sinclair, S. A. (2013). Perspective taking can increase stereotyping: The role of apparent stereotype confirmation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **49**, 10-18.
- Tarrant, M., Calitri, R., & Weston, D. (2012). Social identification structures the effects of perspective taking. *Psychological Science*, **23**, 973-978.
- Todd, A. R., Bodenhausen, G. V., Richeson, J. A., & Galinsky, A. D. (2011). Perspective taking combats automatic expressions of racial bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 1027-1042.
- Vescio, T. K., Sechrist, G. B., & Paolucci, M. (2003). Perspective taking and prejudice reduction: The meditational role of empathy arousal and situational attribution. *European Journal of Social Psychology*, **33**, 455-472.
- Vorauer, J. D. (2013). The case for and against perspective-taking. In M.P. Zanna & J. Olson (Eds), *Advances in experimental social psychology*, vol.**48**, pp.59-115. Academic Press.
- Vorauer, J. D., Martens, K. J., & Sasaki, S. J. (2009). When trying to understand detracts from trying to behave: Effects of perspective-taking in intergroup interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 811-827.
- Vorauer, J. D., & Sasaki, S. J. (2014). Distinct effects of imagine-other versus imagine-self perspective-taking on prejudice reduction. *Social Cognition*, **32**, 130-147.
- Vorauer, J. D., & Quesnel, M. (2013). You don't really love me, do you ? Negative effects of imagine-other perspective-taking on lower self-esteem individuals' relationship well-being. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **39**, 1428-1440.
- Wegner, D. M. (1994). Ironic processes of mental control. *Psychological Review*, **101**, 34-52.

山口和代 (2001). 留学生の日本語表現と文化の影響: イメージ調査と言語表現調査から. 世界の日本語教育: 日本語教育論集, **11**, 225-241.

Yashima, T., Zenku-Nishide, L., & Shimizu, K. (2004). The influence of attitudes and affect on willingness to communicate and second language communication. *Language Learning*, **54**, 119-152.

Keywords: パースペクティブ・テイキング ステレオタイプ 外集団
集団間態度